

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

建国後の現代中国における日本語教育は、1980年代以降、急速な発展を遂げている。特に、改革開放政策のもと、大学などの高等教育機関をはじめ、中学、高校などでも広く行われることになった。だが、その国家政策の変遷とともに、どのような教育内容が提供されたのかについては、これまでほとんど研究が着手されてこなかった。著者は、30年にわたる大学での教鞭生活を通じて、教育部による国家基準、カリキュラム基準の作成、大学日本語教材の開発、編集にも深く携わった立場から、現代中国の日本語教育の理論と実践の具体的姿を本論文において明らかにした。特に、時間軸にそった現代中国のカリキュラム基準の発展と変容について、具体的に分析したのみならず、欧米、日本における外国語教育の実践とも照らし合わせ、その共通性と独自性、改善すべき点を指摘した。

本研究は、中国をはじめ、日本や欧米においても未開拓の分野に、初めて本格的な鋤をいれた労作であり、高い意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文の研究の方法は、本研究分野において、最もオーソドックスなものであり、歴大な政府報告書、研究論文をもとに、それを分析した上で、図表に整理し、問題点を比較検討してまとめたものである。また、筆者が自ら参加したカリキュラム標準の策定作業の中で発見したものや、大学教材を開発、編集する上で体験した内容も盛り込み、極めて説得力が高いものに仕上がっている。

以上の点から、本論文で用いられた方法は、研究目的に良く合致しており、当該学問分野において妥当なものだと評価できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文では、関連の研究文献や研究資料が適切に収集され、研究のプロセスに的確に反映されている。特に、1980年から30年間にわたる大学日本語指導要領を詳細に収集し、分析を行っている。また、関連分野の研究論文についても、CNKI やインターネットなどを駆使して、効果的に収集している。

データの分析については、カリキュラム（指導要領）の変遷において、80年代、90年代、2000年代（21世紀）に分類し、その中のデータを適切に処理している。また、欧米のスタンダードや日本の指導要領との比較などにおいても、多くの資料を適切に処理している。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

総合的な考察としては、1970年代から2010年初めにかけて、日本語教育機関、日本語教師、日本語学習者のいずれにおいても、その数に大幅な増加が見られ、それと共に従来型の語彙や文法を一方的に教授するといった姿勢から、いくつかのステップを経て、概念・機能的なアプローチが重視され、実際の運用を重視する流れに変化してきたことを、歴代のカリキュラムの

特徴と大学日本語教材の分析をもとに考察し、今後のあるべき姿を結論づけている。さらに、まもなく発表される『日本語学科などの教育レベルの国家基準』の策定にも、その研究が生かされている。

以上の事から、本論文の考察と結論が妥当であり、学術的水準に達していると評価できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文で取り上げられた日本語履修カリキュラムの歴史的変遷の分析や、日本語教材の比較、考察は、大学での日本語教育のみならず、中学校や高等学校における日本語教育のカリキュラム策定や教材開発にも大きな影響力を持つであろうことは疑いを容れないであろう。また、英語教育をはじめ、他の外国語教育現場の発展、改善にも大きな力を発揮するであろう。また、中国のみならず、日本における中国語教育、日本語教育にも、少なからぬ示唆を与えることと思われる。

その意味では、まさに理論と実際が効果的に組み合わせられて論じられており、研究上、教育上ともに高い意義を有していると言える。

以上の点を総合的に判断し、審査委員は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与に相応しいとの評価を行った。